



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

形容詞の活用語形2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 昌久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/2700

形容詞の活用語形 2 *

中山 昌久

日本語日本文学**

(2004年9月30日受理)

動詞の場合。

					後部
キ ^ㇿ ル	ト ^ㇿ ブ ^ㇿ	オ ^ㇿ モ ^ㇿ ー	ス ^ㇿ ス ^ㇿ ム ^ㇿ	ウ ^ㇿ ナ ^ㇿ ガ ^ㇿ ス	・ ^ㇿ u ^ㇿ (o ^ㇿ c・ ^ㇿ u ^ㇿ)
キ ^ㇿ ラ ^ㇿ ナ ^ㇿ イ	ト ^ㇿ バ ^ㇿ ナ ^ㇿ イ	オ ^ㇿ モ ^ㇿ ワ ^ㇿ ナ ^ㇿ イ	ス ^ㇿ ス ^ㇿ マ ^ㇿ ナ ^ㇿ イ	ウ ^ㇿ ナ ^ㇿ ガ ^ㇿ サ ^ㇿ ナ ^ㇿ イ	・ ^ㇿ a ^ㇿ ナ ^ㇿ イ (・ ^ㇿ a ^ㇿ ナ ^ㇿ イ)
キ ^ㇿ リ ^ㇿ マ ^ㇿ ス	ト ^ㇿ ビ ^ㇿ マ ^ㇿ ス	オ ^ㇿ モ ^ㇿ イ ^ㇿ マ ^ㇿ ス	ス ^ㇿ ス ^ㇿ ミ ^ㇿ マ ^ㇿ ス	ウ ^ㇿ ナ ^ㇿ ガ ^ㇿ シ ^ㇿ マ ^ㇿ ス	・ ^ㇿ i ^ㇿ マ ^ㇿ ス (・ ^ㇿ i ^ㇿ マ ^ㇿ ス)
キ ^ㇿ ロ ^ㇿ ー	ト ^ㇿ ボ ^ㇿ ー	オ ^ㇿ モ ^ㇿ オ ^ㇿ ー	ス ^ㇿ ス ^ㇿ モ ^ㇿ ー	ウ ^ㇿ ナ ^ㇿ ガ ^ㇿ ソ ^ㇿ ー	・ ^ㇿ o ^ㇿ ー (・ ^ㇿ o ^ㇿ ー)
キ ^ㇿ レ ^ㇿ バ	ト ^ㇿ ベ ^ㇿ バ	オ ^ㇿ モ ^ㇿ エ ^ㇿ バ	ス ^ㇿ ス ^ㇿ メ ^ㇿ バ	ウ ^ㇿ ナ ^ㇿ ガ ^ㇿ セ ^ㇿ バ	・ ^ㇿ e ^ㇿ バ (o ^ㇿ c・ ^ㇿ e ^ㇿ バ)
前部 ㇿ ^ㇿ キ ^ㇿ r・切	ト ^ㇿ b・飛	ㇿ ^ㇿ オ ^ㇿ モ ^ㇿ w・思	ス ^ㇿ ス ^ㇿ m・進	ㇿ ^ㇿ ウ ^ㇿ ナ ^ㇿ ガ ^ㇿ s・促	

活用語形は、例示のように前部の共通性と後部の共通性とへ分解される。動詞になると、仮名単位の細かさでは足りず、子音と母音とへ分けた細かさで分解される。子音と母音とへ分けた表記は、見掛けが不統一になるけれども、それが要る部分でだけ用いてきている。戻し方は、ト^ㇿb・e^ㇿバ、ここからト^ㇿbe^ㇿバつまりト^ㇿべ^ㇿバのように、ただ繋いで・を消す。なお、...w・u^ㇿ、例えばオ^ㇿw・u^ㇿ、スク^ㇿw・u^ㇿだと、オウ^ㇿ、スクウ^ㇿのほかにも、スクーのようにもなる。これだけで済まない場合は、済まないことが問題となるのであり、以下に別に述べる。抽象した前部も動詞と呼んで済まし、後部が、動詞における活用形である。

戻し方は、アクセントを除かないで成り立つ。ただし、前部は、表記上、その前のㇿを目印にしてㇿ有りとなしとで指定してあるように2種に分類され、前部がㇿ有りならば、そのままでは済まらずに、後部の()内で指示する位置にㇿを加えて変形する。後部にもとから有るのでない、()内で新たに追加したㇿがそのㇿである。cは前部の終わりの、有りうる任意の子音を、oはcの直前の仮名1字分を示す。前部のㇿ有りと、活用語形にこう新たに追加するㇿが有ることを指す。例えば、ㇿ^ㇿキ^ㇿr・a^ㇿナイ、ㇿ^ㇿキ^ㇿr・e^ㇿバは、・を消しただけのキラナイ、キレバで済まらずに、ㇿ有りだから、この仮の活用語形を基準としてここからキ^ㇿr・a^ㇿナイつまりキラナイ、キ^ㇿr・e^ㇿバつまりキレバへ外す。うちキレバは、ㇿの後ろのㇿが目立たずにおのずと消えて結局はキレバとなる。()内での、・o^ㇿーのような、同じ位置でのㇿは、もとから有るㇿの前にㇿを加えてㇿであり、後ろのㇿがおのずと消えることになるうちで、前部の種類を区別しないことを表す。前部の種類を区別しないからこれは、あるいは、・o^ㇿーでは変形されないと見ることもできる。()内で・o^ㇿーと書いている工夫は、どの活用形でも変形されるという単純な扱いを優先させた場合のものである。前部が短すぎて、ㇿを加える仮名が無ければ、当然ㇿを後ろへずらすことになるけれども、動詞には語形特徴があって語形の長さが限られるので、ここまでの範囲ではその場合が起こらない。このように、アクセントを除かない分解は、全てにわたっては、ただ繋いで・を消すだけで済まず、以下に別に述べる。

動詞でもこのように、すっきり分解される、澄んだ構造を見ることができる。こう有るだけならば、アクセ

* Inflectional Forms of the Adjective in Japanese 2 / NAKAYAMA Masahisa

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

示したロ^ㇿー, また, ^ㇿキル, トブで例示するとキルマ^ㇿイ, トブマ^ㇿイとあるルマ^ㇿイ, また, オキリ^ㇿ, オトビ^ㇿとある, 語頭にオ-を加えてのり^ㇿ, また, キリナ^ㇿ, トビナ^ㇿとあるリナ^ㇿのように, 1種しか無い場合もある。こう区別の無い場合には, 活用語形に^ㇿが有る範囲で, 前寄りの^ㇿと後ろ寄りの^ㇿとが同じ位置にあると見られる。そして, ^ㇿが無いかわるか, どこに有るかは, 後部がわの性格である。^ㇿの位置は, 活用語形の終わりから逆向きに数えると, 行列に例示の, 例えばレ^ㇿバについて, 前寄りの^ㇿがキ^ㇿレバもオモ^ㇿエバもウナガ^ㇿセバも3字目であり, 後ろ寄りの^ㇿがトベ^ㇿバもスス^ㇿメ^ㇿバも2字目であるように, 前部に関わらずに後部で定まる。一方, 前部は, 個々の後部に触れずに, 活用語形に^ㇿが, ただし, 選べる幅として二つあれば前寄りの^ㇿが, 有るか無いかで性格付けられる。前寄りの^ㇿが, 一つだけ有る場合の^ㇿと同質であり, 後ろ寄りの^ㇿは前寄りの^ㇿが無ければ音水準でおのずと現れる。例えば^ㇿキルは, キラ^ㇿナイなどが^ㇿの有る方, キ^ㇿレバなどが前寄りの^ㇿの有る, だから, 後ろ寄りの^ㇿのおのずと消える方であり, トブは, トバナイなどが^ㇿの無い方, トベ^ㇿバなどが前寄りの^ㇿの無い, だから, 後ろ寄りの^ㇿのおのずと現れる方である。前部の前の目印の^ㇿ有りと^ㇿ無しとは, この区別を個々の前部に指定, 登録したものであり, ^ㇿを使わずに指すときには, ^ㇿ有りを+アクセント, ^ㇿ無しを-アクセントとする。

細かな調整も加わる。例えば, ^ㇿツk・u^ㇿ は, 有るべきツ^ㇿクから, ツが無声なのでツク^ㇿへ外れ, ^ㇿトーs・u^ㇿ は, 有るべきトー^ㇿスから, ーが長音節の後半なのでトース^ㇿへ外れる。ロ^ㇿーが行列に例示の()内の書き方でロ^ㇿーなのは, また, ルマ^ㇿイが同じ書き方でルマ^ㇿイなのも, 長音節の後半では^ㇿが支えられないから, また, イにも長音節の後半に準じられる場合があるから, 2種を本来は区別するロ^ㇿー^ㇿ, ルマ^ㇿイ^ㇿからずれたと見ることもできる。

後部に伴わせる変形規則を活用語形に適用するかどうかを大掛かりに個々の前部で指定しないわけにいかねば, 前部に種類立てが要る。アクセント上のこの種類も, 前部に種類立ての要る変形規則で適切に扱われる。活用語形に^ㇿを, また, 活用語形にもとから^ㇿがあればそれより前寄りの範囲で^ㇿを, 加えるのがその変形であり, ^ㇿを^ㇿ無しの前部は加えず, ^ㇿ有りの前部は加える。トb・aナイ, トb・e^ㇿバならば・を消すだけのトバナイ, トベ^ㇿバであり, 一方, ^ㇿキr・aナイ, ^ㇿキr・e^ㇿバならば, 述べたように, キラナイ, キレ^ㇿバからキラ^ㇿナイ, キ^ㇿレ^ㇿバつまりはキ^ㇿレバへ外すのである。前部と後部とが絡むのは^ㇿ有りの方だけであり, ^ㇿが, また, 活用語形にもとから^ㇿがあればそれより前の^ㇿが特異に働いている。^ㇿが二つ指定される場合の後ろ寄りの^ㇿは, 音水準の性格のものとして, ただ普通にあり, ○を用いずに後部に書き加えることができる。

次に, 前部と後部との組み合わせ方について。これは任意なものを原則にし, 外れて限られる場合に注意していく。例えば, ソグワ^ㇿナイは, ^ㇿソグウのラナ・形であり, しかし, ^ㇿソグウはラナ・, またラヌでしか実現しない。^ㇿアル有は, ラナ・, ラセ(ル)などで実現しない, つまり, アラ^ㇿナイ, アラセ^ㇿルなどが欠ける。

前部の共通性, 後部の共通性の明らかには見えない場合がアクセント以外にもある。変形規則が要る。オw・u^ㇿ, スクw・u^ㇿ がオウ^ㇿ, スクウ^ㇿにとどまらずにオー, スクーのようにもなったのは, ow・u → oー, uw・u → uーと変形してもよいということであり, また, ^ㇿツk・u^ㇿ, ^ㇿトーs・u^ㇿ が, あるべきツ^ㇿク, トー^ㇿスからツク^ㇿ, トース^ㇿへ外れたのも変形である。リテ, リタなどは, 前部を例示の行列の示すと

キ ^ㇿ ッテ	トンデ	オモ ^ㇿ ッテ	ススンデ	ウナガ ^ㇿ シテ
キ ^ㇿ ッタ	トンダ	オモ ^ㇿ ッタ	ススندا	ウナガ ^ㇿ シタ

であり, 変形規則が掛かっている。リテで示すと

r・iテ	} → ッテ	m・iテ	} → ンデ
w・iテ		b・iテ	
t・iテ		n・iテ	
k・iテ	→ イテ	g・iテ	→ イデ

である。ただし, トウ, ^ㇿコウではw・iテ → ーテ, つまり, トーテ, コーテである。s・iテはこの部分がシテのままである。なるべく自然になるように立てる後部は, この場合には, ウナガ^ㇿシテ, ウナガ^ㇿシタが変形されないことからリテ, リタのように立てられるのである。動詞には語形特徴があって活用の行の種類が限られるので, これらで全ての行が尽くされる。リナサ^ㇿイ, リナ^ㇿ は, 例えば^ㇿキルでキリナサ^ㇿイ, キリナ^ㇿのほかにキンナサ^ㇿイ, キンナ^ㇿがあり,

r・iナ → ンナ

を掛けてもよい。ラ行以外は変形されない。

ナサル クダサル オッシャル イラッシャル

でリマ^スは

ナサイマ^ス クダサイマ^ス オッシャイマ^ス イラッシャイマ^ス

であり、レ^テに相当することになる活用形は

ナサイ^イ クダサイ^イ オッシャ^イ イラッシャ^イ

であり、

r・iマ → イマ r・e → イ

が掛かる。先のリテなども、これらでは

ナサ^{ッテ} ナス^{ッテ} クダサ^{ッテ} クダス^{ッテ} オッシャ^{ッテ} イラッシャ^{ッテ} イラ^{ッシテ}

とあり、^テオッシャル以外で変形されることもある。

これらのうちでリテの類、リナサイの類は、変形する前部と変形しない前部とが個々の動詞を指定せずに条件付けられるから、動詞の種類立ての原因にならない。リテの類ではほとんど変形されるうちで...スだけが変形されず、リナサイの類ではほとんど変形されないうちで...ルだけが変形され、こう、活用の行で条件付けられている。詳しく変形の中身について、...w・iテにはw・iテ → ッテとw・iテ → ーテとの区別が要る。ただ、w・iテ → ーテの方でなければならない動詞はごく限られており、例外としての注意で足りる。一方、リマ^ス、レ^テの変形は、個々の動詞を指定する必要がある。...サルでも^テクサル、^テカブサルなどはふつうにクサリマ^ス、カブサ^レである。...サル、...シャルの尊敬動詞は他に無いので、変形されるのを...サル、...シャルの尊敬動詞と条件付ければ、個々の動詞に言い及ばないことはできる。けれども、条件が細かく、また、自然でなく、個々の動詞で指定するのとあまり変わらない。ただ、この変形は、個々の動詞をごく僅かに限っており、整然と大々的なのではない。だから、これも例外として注意されて足りる。この^テナサルなどがリテの類で特異なもの同様に扱われる。

後部は、これらの変形規則を伴うことが個々の活用形の特徴になる。リテの類の変形規則は、リテ、リタ、リタ^ラ、リタ^リといった活用形にある。希望表現のリタ^ハはそれを伴わないから、例えば、リt... という語形上の条件だけでならば、伴うかどうかを指定できない。

もう一つの変形規則がある。こちらは整然と大々的に外れる。前部が、活用語形をルで示すと...eル、...iルとあるもののうちで起こる。

リ^テ、リテ、リマ^ス、ラナ[・]、ルマ^イなどは、活用形の頭の位置のラ行を消す。

レ^テ、ロ^テ、リヤ^テ シナイのリヤ^テ、ラセ(ル)は、活用形の頭の位置のラ行を各々、ロ、ヨ、ヤ、サへ変える。

→を用いる書き方では、これらはリ → φ、レ → ロなどである。このとき、アクセントは^テの位置を、活用語形の終わりから逆向きに数えて同じ位置に保つ。

例えばネル寝、^テオキル起は、こう強変化のままでは済まない。リ^テならばネリ^テ、オキ^リからリを消してネ^テ、オキ^ヘ外れ、ラナ[・]、例えばラナイならばネラナイ、オキラ^テナイからラを消してネナイ、オキ^テナイへ外れる。レ^テならばネレ^テ、オキ^レからレをロへ変えてネロ^テ、オキ^ロへ外れ、リヤ^テ シナイのリヤ^テならばネリヤ^テ、オキ^リからリヤをヤへ変えてネヤ^テ、オキ^ヤへ外れる。このとき、アクセントは、例えばオキ^リからオキ^ヘならば^テが後ろから2字目のままであり、ネラナイからネナイへならば^テが無いままである。なお、例えばミル見のミ^リからならばリを消して後ろから2字目が無くなるので、このような場合には当然、ミ^テのように^テが1字分後ろへずれる。前部が短すぎて^テを後ろへずらすのは、動詞ではこのような場合である。

なお、話し言葉で伸びやかな活用形に当たらないけれども、文語体にとどめられて、扱う範囲をそこまで広げれば、次のようなものもある。

ル^テ(終止)、ルベ[・]などは、活用形の頭の位置のラ行の直前のe、iをuへ変え、そのラ行を消す。

ル^テ(連体)、レ^テバなどは、活用形の頭の位置のラ行の直前のe、iをuへ変える。

同じくネル、^テオキルで、ル^テならばネル^テ、オキ^ルからルの直前のe、iをuへ変え、ルを消してヌ^テ、オク^ヘ外れ、レ^テバならばネレ^テバ、オキ^レバからe、iをuへ変えてヌレ^テバ、オク^レバへ外れる。ただし、

これらの文語体のは、変形される ...eル, ...iルのうち、ニル^ㇿ似, ミ^ㇿル見など、2 字かつ ...iルである動詞には適用されない。ル^ㇿ ならばニル^ㇿ , ミ^ㇿルのままで、レ^ㇿバならばニレ^ㇿバ, ミ^ㇿレバのままで済む。これら、ル^ㇿ などの変形規則は、文献時代の前半へ遡った中央地域の言語が今に伝えられたものである。

リ^ㇿ 以下、これらの活用形では、変形する前部と変形しない前部とが、個々の前部で指定しないでは条件付けられない。...eル, ...iルでなければ変形されない、と言えるにとどまる。...eル, ...iルでも、フケ^ㇿル耽, キ^ㇿル切など、例えばリ^ㇿ でフケ^ㇿリのまま、レ^ㇿ でキ^ㇿレのままであり、こちらも数多く有る。前部が、変形規則を適用する前部と適用しない前部とに大掛かりに、組織立って分かれ、しかも、どちらであるかが語形の特徴その他の条件でおのずとは定まらないから、動詞にはアクセント以外でも種類立てが要る。変形のし方も大仕掛けである。リ^ㇿ などの、これらの変形規則を適用するのが弱変化である。適用しないのが、強変化だった。詳しくは、どの活用形かで外れればどの活用形でも外れるにとどまり、適用する場合の変形規則は前部のうちでずれたりしない。これは、外れるうちで、その習得、維持の負担のもっとも軽い場合である。だから、外れるこの種類は 1 種類しか無い。なお、文語体のル^ㇿ などで外れない、2 字かつ ...iルの動詞は、そのように語形の特徴で条件付けられておのずと定まるから、種類立ての、すなわち、弱変化のさらなる分類の、原因にならない。ル^ㇿ などの変形規則は、弱変化のうちだけで扱うと、個々の前部を指定せずに適用の定まる性格の方である。仮名表記では弱変化を、ネ(ル), ^ㇿオキ(ル)のように、...(ル)と表記する。弱変化では、この表記の(ル)の位置がそのまま活用の行でありつづけなければならない。ラ行を消す、などと外れ、うち、ラ行を消す場合で代表させて活用の行を()に入れて表記するのである。一般の強変化、そこから外れる弱変化、これらが、活用語形の有りように拠る、動詞の活用の種類である。

動詞だと、こう、アクセント以外の語形でも前部に種類立てが要る。種類立てが要るかどうかで、要らない名詞、形容詞と、要る動詞とが対照する。動詞は、仮名より細かく分解しなければならず、前部と後部とが堅く組み合っていることと、そして、前部にアクセント以外でも種類の有ることとに特徴付けられる。これらで手間が、とりわけ掛かるのである。

変形規則にとっては、前部に種類立ての要らないものと要るものとの 2 種が区別される。アクセント以外の語形でも種類立ての要る変形規則の有ることが示された。「動詞の活用」(『研究資料日本文法』第 2 巻, 1984 年)には、前部に種類立ての要らない変形規則だけを変形規則、前部に種類立ての要る変形規則を有標情報と呼んだ。その有標情報は、ここで扱っている変形規則の一つの場合であり、こうして拡張される。

アクセント以外の語形についてのこの種類立ては、^ㇿ有りと^ㇿ無しとの、アクセントについての種類立てと独立になる。例えば

		アクセント以外	
		強変化	弱変化
アクセント	^ㇿ 無し	アガル	アゲ(ル)
	^ㇿ 有り	^ㇿ サガル	^ㇿ サゲ(ル)

のように両者は十字に交叉する。基準だから強変化と^ㇿ無しとが、基準からの外れだから弱変化と^ㇿ有りとが呼応する。アクセント以外の種類と独立になってアクセントが^ㇿの位置を活用語形の終わりから逆向きに一定させるのは、活用語形のアクセントの性格をそのまま示している。形容詞のシ・シーシ、ジ・シージの変形が^ㇿの位置を頭から数えて一定させたことの特異さは、この動詞の有りようとも対照される。

後部は、この、前部に種類立ての要る変形規則に拠っても性格付けられる。整然と大々的な分に応じてこの性格には重みがある。ル^ㇿ , レ^ㇿバ, ラ^ㇿレ(ル)など、基準から外れない活用形もあり、これらは、変形規則を伴わない種類である。例えばネ(ル), ^ㇿオキ(ル)で、ネル^ㇿ , オキ^ㇿル, また、ネレ^ㇿバ, オキ^ㇿレバ, また、ネラ^ㇿレ(ル), ^ㇿオキラ^ㇿレ(ル)とあり、強変化と区別されない。リ^ㇿ などならば、変形規則を伴い、詳しくは、ラ行を消す種類であり、レ^ㇿ ならば、変形規則を伴い、詳しくは、ラ行つまりレを口へ変える種類である。これらの区別が、活用語形の有りように拠る、動詞の活用形の種類である。

さらに細かく、この弱変化にも似ており、しかし、強変化からも弱変化からも外れる動詞がある。ル^ㇿ で示すとスル^ㇿ為, ク^ㇿル来がその著しいものである。ごく僅かな動詞に限られるから、これらは例外として注意されて足る。

変形規則をいろいろ挙げてきた。ちなみに、少しく歴史過程へ言い及べば、変形規則には歴史過程をなぞっていることの知られる場合がある。リテなどは、ここはアクセントを除いて書くとして、¹カク、¹キルで例示すると

		弱化		均化		短化		
カ <i>k</i> ・iテ	=	カキテ	>	カイテ	>	ケーテ	>	ケテ
キ <i>r</i> ・iテ	=	キリテ	>	キツテ			>	キテ

とある変遷の、すでに弱化し、まだ均化、短化しない段階にある。カキテなどからカITEなどへの変動が前部と後部との繋ぎ目を跨ぎ、特定の後部でだけ前部の語形が活用語形に保たれないから、体系の記述ではk・iテ→ITEなどの変形規則となる。対照して、繋ぎ目を跨がなければ変形規則の原因にならない。例えば

		弱化		均化		短化		
ハフ _{r・u}	=	ハフル	>	ハウル	>	ホール	>	ホル
		弱化		均化		短化		
カ _{k・aム}	=	カカム	>	カカウ	>	カコー	>	カコ

ならば、前部がハフル放からホール、さらにはホルへ入れ替わり、後部がラムからロー、さらにはロへ入れ替わるだけのことである。名詞、形容詞の場合と同じことであり、名詞、形容詞と並行に、当然、動詞もこう扱われる。

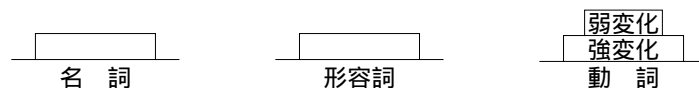
ただし、動詞では、変形規則が歴史過程をなぞっているとは限らなくなる。前部に種類立ての要る変形規則の、ラナ・などでう行を消したり、レ¹でう行つまりレをロへ変えたりなどは、土台の音水準での変動に因るとは想定しづらい。変形規則には、音水準で必然性の無いものもある。名詞、形容詞と対照して動詞は、このような変形規則の見られやすいことにも特徴付けられる。

動詞は、以上のような手続きで、前部の一覧、後部の一覧、変形規則の如何が示される。前部にはアクセント以外でも種類が有る。

活用語形の記述のし方を、名詞、形容詞、動詞の順に示した。

活用語形は前部の共通性と後部の共通性とへ解析され、そして、そこへ、そこからの外れが変形規則として加わる。このとき、扱う手間の掛かり方の違いに映って、これらの品詞に性格の違いもある。扱いがもっとも易しくて名詞は、仮名単位で分解され、前部が独立し、アクセントも前部と後部とがあまり絡まず、変形規則で前部に種類立てが要らない。扱いがやや難しくなって形容詞は、仮名単位では分解され、前部が独立的な性格を帯び、しかし、明らかに独立せず、アクセントは前部と後部とが絡み、ただし、アクセント以外について変形規則では前部に種類立てが要るほどではない。もっとも難しくなって動詞は、仮名より細かい単位で分解しなければならず、だから前部が独立するはずも無く、アクセントは前部と後部とが絡み、さらに、アクセント以外についても変形規則で前部に種類立てが要る。

基準からの外れは、基準を土台にして言うことだから、基準を基底にしてその上に上層として乗る。品詞の性格のうち、いま、前部にアクセント以外について種類立てが要るかどうかをこの成層構造に当てれば、種類立ての要らないのは基底しか無く、種類立ての要るのは上層も有ることである。



と図示される。名詞は一般名詞と、マレダ、ユ¹タカダなどの語類との、構文上の働きに関わる区別を別にして言っている。